

ラウンドテーブル

「“総合政策”への挑戦 ～天野明弘先生を悼んで～」



2011年5月27日、関西学院上ヶ原キャンパス関西学院会館において関西学院大学総合政策研究科リサーチ・コンソーシアム第13回総会記念事業が開催された。総会記念事業の一環として、翼の間において天野先生を悼む下記5人のパネリストによるラウンドテーブルが開催された。開催趣旨は以下のようなものである。

「天野明弘先生は2010年3月25日、闘病生活を終えられ、黄泉に旅立たれた。天野先生は1995年4月に関西学院大学総合政策学部の初代学部長として、神戸大学から招かれ、総合政策学部の発展の基礎を築かれた。

天野先生は国際経済学者として確固たる地位を築いておられたが、90年代になって環境経済学に転身され、その草分け的存在になられた。先生は象牙の塔に籠られるのではなく、ご自分の研究成果を社会に還元することにより、持続可能な社会の実現を目指された。

中央環境審議会等に参加され、積極的に環境政策の構築にも係わられた。今日の日本の温暖化対策は先生存在を抜きに語るのは困難であるし、また地元兵庫県環境政策にも貢献された。

関西学院大学を定年でご退職された後もその姿勢は変わることはなく、地球環境戦略研究機関関西センター所長、さらには兵庫県立大学副学長という要職に就かれるかたわら、常に総合政策学部と総合政策研究科の行く末を見守っておられた。そして病魔に侵されて後も、あくことなく、研究と社会貢献に邁進され、知の巨人、総合政策の達人としての生涯を全うされたのである。

このラウンドテーブルは天野先生と色々な局面で親密なおつきあいのあった5人のかたがたに、天野先生との思い出を語っていただき、いまいちど天野先生のご生涯にさまざまな視点からのスポットライトを当てて、天野先生の偉業を讃えるとともに、いつときも先生の脳裏を去ることのなかった、これからの〈総合政策〉の在り方を問おうとするものである。」

パネリスト	新野幸次郎氏（神戸大学元学長）
	武田 建 氏（関西学院元理事長）
	久保田哲夫氏（総合政策研究科教授）
	一方井誠治氏（京都大学経済研究所教授、元環境省）
	小林 悦夫氏（元兵庫県環境局長）
司会	久野 武 氏（総合政策研究科教授）

当日の会場は満席で、天野先生の奥様にもお越しいただき、お言葉を頂戴した。以下がその記録である。

久野：天野明弘先生は、関西学院大学総合政策学部の初代学部長として、学部の礎を築かれた方です。まさに活動する知の巨人として、常に総合政策のことを思いながら、進んでこられました。

天野先生が昨年3月25日に亡くなられてから、1年が過ぎました。今回のリサーチ・コンソーシアムでのパネル・ディスカッションでも、リーマンショック、津波ショック、そして原発ショック等が話題になりました。様々な日本社会の曲がり角にあって、今こそ総合政策の出番とすべきですが、「天野先生がおられたら、今、どんなことを考えておられるだろうか?」と思わずにはいられません。

本日は、天野先生と関わりの深かった5名の方々にお越しいただき、天野先生とのお付き合いや、先生のお言葉について色々とおうかがいいたします。天野先生の奥様もお越しいただいたので、最後に、一言ご挨拶いただきたいと考えております。

さて、天野先生は神戸大学で教べんを取られてから、総合政策学部に移られたわけですが、我々は、神戸大学時代の天野先生をあまり知りません。そこで、天野先生が移られた経緯などを、当時神戸大学で学長を勤めておられた新野幸次郎先生にうかがいたいと思います。そして、受け入れ側では、関西学院理事長であった武田先生にお話をいただきたいと思います。

新野：ご紹介いただいた新野です。私は神戸大学で定年まで勤めていましたが、天野さんは私より七つ、正確には八つ違うのですかね。神戸大学の経営学部に、私が大変懇意にいただいた入江先生という方がおられました。天野先生はそこで勉強されて、大変業績を挙げて、注目されてこられた方でございます。

つい最近も、私も理事長を務めたことのある神戸大学の凌霄会という卒業生の会誌に、「天野先生を知ろう」という追悼の辞を、2人の教え子の方が書いていらっしゃる。昭和48年卒で神戸大学経営学研究科に勤めていらっしゃる出井教授、それから昭和55年卒で大阪大学社会経済研究所の教授をお勤めの池田先生です。本日は時間の都合で、詳しくはご紹介しませんが、このお2人の追悼の辞は、天野先生がどれだけ学問的に優れ、かつ教授として自分たちを育てていただいたか、見事に描き出されております。先ほどお聞きしますと、天野先生を偲ぶ追悼論集が総合政策学部で出版されるようで、その中にぜひ入れていただくようお願いしました。(註：本書に資料として掲載)

さて、私がここに呼ばれた一番大きな理由は、天野先生が関西学院の総合政策学部長に就任されるきっかけかと思えます。実は、お隣にお座わりの武田先生が、新学部開設にあたって、何回か、私の方にご相談にお見えになりました。

当時、私は神戸大学でそういう仕事にあたっているだけではございませんでした。その頃の文部省、現在は文科省ですが、新しい大学をつくる時はその大学設置審議会の議を経て、許可があります。その審議会の常任委員を務めていた関係で、大学設置について色々な知識を持っておりました。そんなこともあって、武田先生とは親しくしておりました、現在はちょっと病気をされておりますけれども、田中國夫先生でございましたか、社会学部ですかね。それから、昔から互いに親しかった今井先生という神戸YMCAの総主事の方などと一緒に、ご相談を受けておりました。たまたまですが、私が助手の頃から親しくしておりました慶應大学の加藤寛教授が、慶應大学の総合政策学部を申請されて、その審査に私が当たったこともありました。そのため、総合政策学部の内容について、自分なりに結構勉強させていただいたわけです。それと同じような総合政策学部を、関西学院で三田におつくりになるということになりました。

武田先生はご承知のように、大変立派な学者でいらっしゃるだけではなく、最初に存じ上げるようになったのは、神戸大学のアメリカンフットボール部をいかにしてもう少し立派にするか、お願いをしていた関係もございました。その武田先生が一所懸命になって新しい学部を立派なものにしたいとおっしゃるので、私も親身になって考えさせていただいたのです。

新学部開設で一番大事なことは「どんな方を持ってくるか」でございます。武田先生は私に「全

国的に考えても立派な人を選んでほしい、推薦してほしい」と言われました。長年の親しい関係もごぞいます。一所懸命、新しい学部づくりをおやりになっている武田先生に私は感服して、知っている限りで一番良い先生を選ばなければならないと色々な方を考えたのです。

その中で、かねてから私が尊敬している天野教授が、ちょうど私が学長時代に経営学部長も2回続けてやっていただき、大変親しくしておりました。天野教授に相談すると「しんどい仕事だけれども、やっても良い」とご理解をいただきました。そこで、天野先生をご紹介して、後を引き受けていただくようになったわけでごぞいます。

新しい学部の特徴とは、慶應の総合政策学部匹敵する学問的な水準の非常に高い学部でなければいけません。さらに、優れた先生方を集める仕事だけではなく、素晴らしい学部運営を行って、関西学院の中でも最も優れた学生を集める学部にしなければいけない。そこで、天野先生や、武田先生、それから田中先生もご一緒だったと思いますが、何回かお話をさせていただいて、お引き受けいただきました。

先ほど触れた『凌霄』に天野先生がどれだけ立派な国際的な業績を挙げてこられたか、お弟子さん2人が見事に描き出されておりますけれど、学問的才能だけではなく、実際に、学部長としてのお仕事を、私は学長として見ておりました。もう安心してご推薦しましたところ、その仕事を見事にやり遂げられてこられました。

後で、武田先生から「天野先生の方には、足を向けて寝られないように思う」とおっしゃっていただき、私も大変うれしく思ったわけです。私はただ、天野先生の優れた才能をかねてから尊敬しておりましたから、私がやらされている関西での仕事はだいたいある年齢になりましたら、みんな天野先生にお願いをして引き継いでいただきました。

例えば、皆さんのお手元に天野先生の「略歴・研究業績一覧」がごぞいます。2ページをご覧くださいと、一番下から2番目の平成11年のところに関西生産性本部副会長と書いてごぞいます。これも私がやっておりましたことを引き受けていただきました。天野先生が辞められた後は、関西学院大学の元学長の平松先生に引き受けていただき、いまだに評議委員会の副会長もやっていただいております。また、大変雑ばくな仕事ですが、IBMがバックアップして、関西、とくに大阪と神戸の先生方と財界人等を集めて六甲会議をやっていますが、その世話人も天野先生に引き受けていただきました。その他にも、つい最近まで、亡くなられる本当に数日前まで、兵庫県の“ひょうご震災記念21世紀研究機構”の外部評価委員会で一緒にお仕事をお願いして、今日まで来ております。

そんなに風に色々なことをお願いしたせいで、お身体に差し障りが出たのか、といまだに悔いる気持ちでごぞいますけれども、単に学問的業績だけではなく、関西学院と兵庫県の色々なお仕事に大きな業績を残して逝かれたのだ、と思っているところです。どうもありがとうございました。(拍手)

武田：武田でごぞいます。天野先生の思い出と申しますと、どうしても総合政策の開設とに結びつきますが、先ほど新野先生がお話されたように、私は新野先生を通して天野先生を存じ上げるようになりました。

総合政策学部開設は、私が理事長になって最初の大きな仕事だったと思います。理事長とは「どんどん計画して、それを進める」と多くの方はお思いになるかもしれませんが、関西学院の理事長はなかなかそういうわけにはまいりません。大学、学部、高等部、中学部の意向を聞きながら、十分それに配慮して色々なことを進めなければ学内が非常に難しくなります。それを調整する立場にあるのが理事長です。

新学部を三田につくるということで、「どんな学部をつくるか？」はもっぱら学長以下、学部長も入っていただき、大学の方々がごぞになる。“学院”と言っていますが、理事会側の私たちは、どんなキャンパスをつくるのか？ どんな校舎を造るのか？ 環境の整備を担当するなど、分業し

ておりました。

とは言いましても、勝手にバラバラなことはできません。隔週ぐらいに全委員が集まって、計画を練りました。だんだん煮詰めてゆくには、新野先生がおっしゃったように、慶應の総合政策学部が一つのモデルだったことは事実です。しかし、“そっくり”というのはやはり関学のプライドとして許せませんので、「環境重視」の総合政策をつくることになりました。先生方と相談の上で、学際そして国際を軸に学部をつくっていこうと話し合いました。

ところが、大学というところは、当然のことですが、法学部は法学者が多い、経済学部は経済学者が多いわけです。総合政策は学際的ですから色々な専攻の先生方がおいでになる。理事会で「武田、総合政策学部っていったい何を教えて何を勉強するところだ」と聞かれて、困ってしまいました。私は天野先生と違って“総合政策”はよく分かりませんから、とっさに「簡単に言えば、アメリカのリベラルアーツカレッジみたいなものです」と言ったら、「ああ、そうか」と納得です。私にすれば上出来の答えだったと思っております。

私は同時に、「英語の関学の復活」を夢見ていました。大学ではどんな学部でも英語教育をしています。総合政策学部では北米から TESOL と言って、外国人に英語を教えることを専攻した若い先生に来ていただき、さらにその専攻で博士号を取った方に何人か来てほしいな、と大学にお願いしました。その願いがかなえられて大変喜んでおります。総合政策で勉強なさった方々が英語が強くなり、やがては海外で活躍し、中には留学なさる方もどんどん出てきました。そんな総合政策の影響が上ヶ原に及んでくれたら良いな、というのが私の夢でございました。私は、外国人の先生の枠を 50% ぐらいにしてくださいと開設委員にお願いしましたが、値切られて 40% で落ち着きました。これが実際のスタートでした。

これからが本論ですが、新野先生へお願いしたのは、こんな総合政策学部ですから、根幹になる専門領域をご専攻していて、英語にお強く、外国で博士号を取って、外国人の先生から尊敬を受けながら、彼らをコントロールできる方をお願いしたいと虫のよいことを考えました。私独りでおじゃましても良かったのですが、「また武田が 1 人で独走した」となるとはいけませんので、その他大勢で新野先生お一人のところへワットと押しかけました。それは、全学で新野先生におすがりして、「天野先生に来ていただきたい」とお伝えしたかったのです。

柘植学長も、新野先生そして天野先生にお会いになって、とても喜ばれました。私としても、本当に良い先生をお世話いただいたなと思って、確か拙宅で、新野先生と天野先生ご夫妻と晩ご飯の会をさせていただいたような記憶があります。この関学会館ができる前でしたから、関西学院としては料亭か何処かで御馳走すべきだったのですが、予算がないので我が家でしたというのが関西学院の理事長の実情でございまして、私が財政問題を話すと、苦しい財政も漫談になりますが、懐かしい思い出です。

教員の採用には、天野先生はあまり関わらず、関西学院に任せてくださったと思います。しかし、学校が始まると、天野先生が素晴らしいリーダーシップを発揮なさり、学部内の先生方全員から尊敬されているとひしひしと感じました。

天野先生からは色々おねだりを受けました。その一つは、聖句でした。キリスト教の学校ですから、聖書の言葉を校舎に刻みますが、聖句を書いていただく方を私に選んで欲しい、と頼まれました。天野先生のお願いでございまして、どなたでも良いというわけにはいきません。ない知恵をしぼって、「そうだ、商学部に宮本先生というミシガン州立大学のビジネススクールを出た先生がいる」。私と留学先が同じだったから頼んでみよう、ということにしました。

実は宮本先生のお父さんが竹逕先生という、日本のひらがなの書家ではナンバーワンと言われる方です。小さな菓子折を持って竹逕先生を訪れて、「すみませんけど聖句を書いてください」とお願いしました。それで聖句を二つも三つも書いて戴いて帰ってきたら、理事会で「正門にも“関西学院”と書いていただけ」と言われて、またお菓子を持って行って「よろしく」。情けない理事長です。天野先生とその話で大笑いしたことが懐かしく思い出されます。

それから、天野先生が実際に1年生を迎えて、2号館の大きな教室で1年生全員を集めて講義をされておられるところを、私は一番後ろで拝聴しながら、神戸大学にいらっしやる時にはこんな大教室でのご講義をやったことはなかつたらうな、と申し訳ないという気持ちでいっぱいでした。

三田のキャンパスですが、私にとって、理事長になりたてのプロジェクトでしたから、どんなものができるのだろうと、想像もできません。私はそういうことにはうといのです。関西学院は、最近では日本設計という会社に設計をお願いしています。日本設計さんを疑うわけではないけれど、もう一つ日建設という大会社の社長さんを個人的に存じ上げていたものですから、そこへ日本設計が作ったレイアウトの図面を持っていきました。

「日本設計がこんな作りでしたが、どう思われますか」とお金も払わずに見てもらいました。社長さんは日建設の部長さんを全員集めて「三田はどうだ」と聞いて下さったのを目の前で拝見して、無知とは恐ろしいものだと思いました。それで、お礼の意味をかねて、また天野先生も「チャペルが欲しい」と言っていたので、チャペルだけは日建設に設計していただいたのです。あのチャペルの建設も天野先生のご貢献の一つではなからうかと思えます。

それから、総合政策学部の二つの校舎は、右と左の校舎を回廊がつないでいます。ここで全部はらしますけれども、日建の社長は「そんなもん取っ払ってしまえ」と言われました。日本設計とは商売敵ですから、そうおっしゃったのかもしれませんが、「これだけ軸線がきれいになっているのだから、あんなものをつけずにダーッと奥まで見渡すようにしなさい」とおっしゃったのです。次回の委員会で、日建の社長のお話をそのまま言いましたが、「回廊も良いな」という気持ちもございました。あまり我を張ると日本設計さんが全部やってくださっているのに具合が悪いなと思って、天野先生にお預けしたのです。天野先生が色々気を使われて、両者の間に立たれたのですが、結局、天野先生のご決定で回廊が残りました。でも、天野先生は、私に気を使って、「武田さん、あれを残したけど、雨が降ったら、あんなもん全然役に立ちません。我々は傘さして歩いています」とおっしゃってくださいました。そのほか、天野先生は色々夢をお持ちで、学生会館が欲しい、図書室が貧弱だから、図書館を建てたいなどおっしゃいました。でも残念ながら私の在任中にはなかなか実現しませんでした。

それから、学院では大学の学部長の先生と法人側の部長以上と一緒に、部長会という集りを月1回やるのです。私は三田の天野先生とお会いする機会がなかなかないものですから、部長会の後で、私の小さい車でJRの甲子園まで天野先生をお送りさせていただきました。「よくあんなむちゃなことをしたな。先生がよく私の運転を安心して乗ってくださったな」と思っているのですが、それが先生のお命に障ったのではないのかな、私のご寿命を縮めたのではないかなと心配しております。車を運転しながら、学校の運営、法人の問題、先生のご希望だとか、三田に限らず、関学全体について色々話し合いました。それがどれだけ私を助けてくださったか分かりません。そんな願いが実って、総合政策が国際的な学部に発展し、英語の関学を支える学部になってくれました。地域とつながる学部になり、地方自治体、経済界、そしてこのリサーチ・コンソーシアムとか、次々に新しい計画が、天野先生と執行部の安保先生だろうと思えますが、残してくださいました。天野先生には心から感謝申し上げて、ちょうど私の時間が来ましたので、この辺でマイクをお返しします。(拍手)

久野：ありがとうございました。私は開設2年目に来ましたが、いま初めて聞きました。それでは、天野先生と共に苦勞されて、現在も頑張っておられる久保田先生に、総合政策学部設立以降の苦勞話をお聞かせいただければと思います。

久保田：久保田です。本日のパンフレットでの天野先生のお顔はやはり素晴らしいですね。もう一番良い写真ではないかと思うほど、本当にこやかな顔ですが、実は私にとって天野先生の最初のイメージはもう怖い先生でございました。

私は、大学院時代から国際金融論という科目を勉強していたのですが、その頃には天野先生はもう日本の権威のお1人ですから、それこそ一兵卒が將軍を見るような感じの立場でした。ですから、「怖い、偉い先生」というイメージしかなかったわけです。総合政策学部でお会いするまで、20年ぐらい「素晴らしい、偉い、怖い先生」というイメージだけでいたわけです。

ちなみに、私の先生は小寺武四郎という先生ですが、実は、関学と神戸大の金融関係は仲良しでございまして、天野先生は小寺先生の大学院の時代の授業を受けていたのだそうです。後で小寺先生に聞きますと、「私が今まで教えた中で、これかと思った学生は2人いる」というお話でございました。お二人とも関学の私らではございません。そのうちのお一人が天野先生です。もうお一方も関学ではなくて、その時、私たちは不肖の弟子だなどつくづく思ったわけです。

ともかく大学院の頃から素晴らしい光るものを持っておられた先生ということで、私としては大先輩を仰ぐようなかたちですが、天野先生が学部長だった4年間、学生主任と一緒にさせていただき、色々な楽しい思い出を作ってきました。天野先生とこういう顔の時もお付き合いできたことで、私としては非常にうれしいのですが、いくつか私の関係でお話いたします。

実は、総合政策学部をつくることについて、関学ではずいぶん大きな論争がございました。総合政策学部云々よりも「土地をどうするか？」という問題で、学内が二派に分かれました。その意味では、総合政策学部はとぼっちを受けたかたちもあるのですが、私どももどちらかというところ「あんなとこの土地買ってどないすんねん」という立場で反対していた方です。

しかし、「三田につくる」となった以上、何とかやっつけていかなければいけないという思いから、私が当時一番心配しておりましたのは宗教主事です。宗教主事はやはり関学の文化を伝えてもらわないと困る。実はその当時、船本弘毅という社会学部の先生で、国際交流部長もしたこともある。そういう意味で、総合政策学部が一番向いているのではないかという先生がおられて、その方に「総合政策学部の宗教主事として手を挙げなさい。もし1人で行くのが嫌だったら、私も一緒に連れて行ってあげるから」と言ったのが、回り回って遠藤先生に話が行ったようで、久保田は行って良いと言っているよということで、遠藤先生から電話がかかってきたのです。

私が誇りとするとところは、その時に「妻と相談するから」と言わずに、その場で引き受けたことです。やはり、そこで「いったん相談して」と言えば男がすたる。男の生き方と美学を貫きました、その後、おかげでずいぶん苦労しましたが。

その時点で、天野先生が学部長に決まっていました。その意味で、何を心配したかと言えば、上ヶ原からそれほどたくさんの方が行くわけでもない。関学は一つの、結構独特の文化を持っている。私は、それを良い文化だと思っておりますが、それを伝えていくことが可能かどうかということだったのです。

実は、天野先生が学部長だった始まりの頃、私が一番びっくりしたのは、天野先生が関学の歴史や文化をものすごく勉強しておられた。そして、それをみんなに伝えていこうという意識がものすごく強かったことです。これは本当に感動いたしました。神戸大学の先生ですから、関学とは違う文化で育ておられた方であるにもかかわらず、これだけ関学の文化を理解されている。もちろん、関学の文化の中には問題もありますから、その点については色々なかたちで発言されておりました。しかし、少なくとも関学の中で良いものを自分も伝えていきたい、という思いをずいぶん持っておられたと思います。最初の年に色々な場所でお話をされていましたが、その話の一つ一つを聞いて、ずいぶん勉強されたのだな、お忙しい先生がよくこれだけ時間をかけられたなど、感心して見ていたわけです。

私にとって、天野先生とは、まず始めに国際金融論、国際経済学の先生です。次が計量経済学の先生。どちらも私たちにとって、自分たちが勉強していることを先にやられた先達で、非常に立派な成果を挙げておられる。略歴をご覧になられたらお分かりと思いますが、理論計量経済学会会長をやっておられます。現在は、日本経済学会と名前を変えて、日本の経済学に関しては一番大きい学会です。

色々な学会に入っている人も、必ず日本経済学会には入っている。これに入っていないともぐりだという学会です。その会長をされた時に、私は、会長講演を聞きに行きました。その時、実は環境の話をされたのです。私はその時に初めて天野先生が軸足を環境のほうに移しておられることを知って「あれ？」と思ったのです。

したがって、総合政策学部が環境をベースとして、天野先生をお願いしたということは、その意味で、自然に「あ、なるほど」と理解できたわけです。私自身は環境経済を専門にしておりますが、計量経済学、そしてその前に手がけられた国際経済学等の学問的業績と同じ精力で、環境問題をやられている。事実、知っている方に聞くと、やはり権威として非常に強い形でやっておられるということで非常に喜んだことでした。

その意味で、天野先生が環境問題に取り組んでおられることも知っていました。天野先生が総合政策学部の学部長として来られることが、学内に一般的に広がったのはいつ頃でしたかね。その時、本当にもう全員が「ああ、よくやった」、本当に「理事長、よくやった」と、みんなが武田先生を見直したのですが、新野先生が関わられたとのことで、私どもは新野先生に足を向けて寝られないわけです。

さて、天野先生が来られてからは、先ほど申しましたように、学部の精神的な支柱という意味で、非常に頑張られたわけです。実際に学生主任としてお仕えしていると、精力的なのです。始まった直後は、私どもゼビウス状態と呼んでおりました。その昔、ゼビウスという有名なゲームがございました。次から次から現れる敵を撃ち落としながら前進するというゲームです。要するに、総合政策学部はもう次から次から問題が起こる。

先ほど申しましたように、大学にはその文化がありますが、総合政策学部は他の大学から来られた先生も多い。また、もともと教員でなかった方もたくさんおられる。大学では当然のように通用していることが、通用しないことがたくさんあるのです。天野先生はそれを「ちゃんと説明せよ」と言うわけですが、私どもとしては、あまりにも常識的で説明のしようがない。齟齬（そご）が起きて初めて、「あ、これは常識ではないんだ」と分かる。だから、「前もって説明せよ」と言われても、こちらとしては説明のしようがないわけです。

様々な問題が起こる中で、実は入院問題がございました。遠藤先生がまず病気になられて、その後、天野先生が入院され、その後、安保先生の奥さんが入院され、次は久保田だと言われていたのです。私は病気にならなかったので、よほど私だけ別物かなという感じもしますが、実は天野先生の入院も大変な話です。始まったばかりで、みんな天野先生を頼りにしているところでの入院です。ところが、入院中は暇だからといって、それは病院におけるわけですから暇でしょう。ですけれども、本を2冊書かれたのです。そのうちの1冊は『総合政策入門』という教科書で、1年目の講義の内容を本にされた。ノートを本に整理されたわけですが、正直、それほど簡単な話ではありません。私どもが一番困ったのは、「学生主任として忙しいから勉強できない」という言い訳を、天野先生の前でできない。普通は、学部長は事務で忙しいから、授業もゼミだけ。研究業績等なくても当然ですが、天野先生はそうではなかった。私どもはそのおかげで「忙しい」という言い訳が通らず、ずいぶんつい思いをいたしました。つまりは、ずいぶん精力的に活躍されたわけです。話のついでに思い出しましたが、天野先生に「だまされた」と言われたことがあります。実は、学部長はゼミ以外の授業を持たなくて良い。経済学部では、経済学部長が選ばれるとカリキュラムが改正されます。つまり、その先生がやるはずの授業がなくなるので、別の先生が担当しなければいけない。ところが、天野先生は「総合政策入門」という必修授業をやられたのです。それで、天野先生に「学部長って授業しなくて良いの知ってます？」と言ったら、「えっ、だまされた」と。もちろん、文科省に届けていますから、学部長といえども担当してもらわないと困るわけですが、他学部ではしなくてよい仕事までずいぶんしていただいているわけです。

「総合政策入門」はいま私が担当していますが、天野先生でなければできません。天野先生のテキストを参考に何とかやっていますが、天野先生だからできた授業だと思います。天野先生の後

しばらくは、何名かの先生で分担していましたが、天野先生には正直、本当によく頑張っておられたと思います。皆さんにもできれば天野先生の『総合政策入門』を読んでもらいたいです。あと、私が天野先生に威張れることが一つだけあります。天野先生は神戸大学のグリークラブでした。私は関学グリーの出身ですが、あの当時ははっきり申し上げて、関学グリーとは比べものにならない。お聞きしますと、天野先生は学生時代に学生指揮者をやっておられた頃、関学グリーの練習を見ては技術を盗んでいたという話をされました。もちろん私よりはるか先輩の頃の話ですが、グリーでは私の方が勝つわけです。

天野先生が音楽にお詳しいことを知らない方が結構多いのですが、兵庫県の芸文ができましたね。あそこの定期公演の会員として、奥様と一緒にずっと来られて、私はそのたびにご挨拶をしていました。三田キャンパスの初代事務長の尼子さんがバロック音楽を好きで、バロックの話になると、私どもがついていけないマニアックな話をお二人でされていました。天野先生は決して勉強一筋のガチガチではなくて、そんなところもあった本当に魅力的な先生だったことをご報告させていただきます。(拍手)

久野：ありがとうございます。実は、私も天野先生のお葬式で、初めて音楽のことをお聞きしたわけでございます。また、その前年にお見舞いに行った時に、ベッドの上でやはり本を書かれていました。驚いて、ますます天野先生は研究一筋の方だと思っていましたが、お葬式でまた一つ分かったことでございます。

ここでフロアからお二人のかたにお話しさせていただきます。教え子から見た天野先生として、最初は1期生の金世徳さん、現在は芦屋大学で教鞭を取っておられます。

金：金世徳と申します。韓国から留学生として来ました。偉い先生方が、天野先生の偉大さを語っていただいているのに、私の方からは「こんなに天野先生をこきつけたことになって、大変申し訳ない」とお話ししなければいけません。

まず、先生に大変ご迷惑をかけたのが、4年生になる直前に結婚してしまった。学生結婚で大変お世話になりました。結婚式後に、家内は韓国からきたのですが、先生の研究室兼音楽室でご挨拶させていただくと、先生から立派な食器セットをいただき、それをいまだに大事に使わせていただいています。

その後、無事、大学院で先生のゼミ生になりました。私の夢は、総合政策1期生として第1号の博士号を取りたい。天野先生にお願いして、博士課程まで進学をする予定だったのですが、残念ながら、ちょうど私の修士課程が先生の関学でのお仕事の最後で、博士後期課程はご指導できないため、他の先生を紹介していただきました。私は英語ができなかったのも、残念ながら関学の博士課程には進学できなかったのです。

その後、1年間、浪人をしながら、お忙しい先生のご自宅にたびたびおじゃまして、色々アドバイスを受けて、運よく先生の母校の神戸大学の博士課程に進学して、無事、博士号を取りました。もっとも、世の中、そんなに甘くなく、すぐ就職はできず、初めての仕事が兵庫県立大学の非常勤講師で、やっと「半人前になりました」と天野先生に報告したら、「俺、そっこのいま副学長やってるで」とおっしゃって、全然知らなかったのです。

先生には、立派に一人前になれた姿をぜひ見ていただきたいかったのですが、歳月が流れても先生に報告できませんでした。本当に残念だと思うのですが、ちょうど去年からやっと一人前の仕事をいただきました。もし先生が、いま天国からこの会場を見ていらっしゃるのであれば、「先生、本当にありがとうございました」ということを大きい声で言いたいと思います。「ありがとうございました、先生」。(拍手)

久野：ありがとうございます。

さて、天野先生は安保先生と組んで、持続可能性研究会を立ち上げられました。しかし、安保先生が亡くなられ、天野先生もすでにご退職で、学内代表者がいなくなりました。それで天野先生が「久野さん、会長になってくれ」、「何もしなくて良いので、名前だけ貸してくれ。実務は中尾さんがやってくれる」ということで、当時、院生だった中尾悠利子さんにお話を伺います。

中尾：総政修了生の中尾悠利子と申します。久野先生が触れられた持続可能性研究会とは、リサーチ・コンソーシアムの会員企業の方々、シャープさんや富士ゼロックスさん、それと京都女子大学等の他大学、さらに関西学院の商学部や経済学部、社会学部などの環境系の先生と院生をメンバーとして年数回、研究会を開いていました。

富士ゼロックスなど東京の企業の方も参加されて、最新のトピックスについて議論しましたが、天野先生の人柄も手伝い、先生なしには盛り上がりませんでしたと感じています。研究会では、天野先生は環境経済や環境政策だけではなく、環境経営やCSR等についても報告されていました。また、研究報告だけで終わらず、きちんと社会に成果を出すことが重要だと考えて、関西学院大学出版会から2004年に『持続可能社会構築のフロンティア』を出しました。

それから、この研究会には博士課程に進んで、天野先生の指導で研究者を目指していた田中彰一さんがいらっしました。神戸三田キャンパスから上ヶ原キャンパスまで、田中さんと私と天野先生で、車にご一緒した際に、車内で会話する機会がありましたが、天野先生から奥様のこと等を話されたことが印象に残っています。

田中さんは、学生時代に、先ほど久保田先生も触れられたグリークラブに属していて、天野先生とグリーの話で盛り上がっていたことも覚えています。ただ、残念なことに田中さんは2003年12月に病気のため、お亡くなりになりました。天野先生の当時の最先端の気候変動政策等のご研究上の道半ばだったことが残念でなりません。

私が天野先生に最後にお会いしたのは、次にお話される一方井先生も講師として参加されたひょうご講座「気候変化に対する国内政策の処方」、毎週土曜日に開催されていたものです。各界のNGOや学会、産業界の方々毎週1回、最先端の気候変化に関してご報告されました。最終回が12月でしたが、議論が白熱して、天野先生は時間制限がなければ何時間でも議論を続けたいとおっしゃっていました。本当に、皆さんと議論するのが楽しい方なのかな。1時間半の議論ですが、まだまだしたいとおっしゃられて、心から楽しそうだったのを覚えています。(拍手)

久野：ただいまお話いただいた持続可能性研究会ですが、研究成果を単行本として出版しました。実は、この出版がまたトラブルになって、上ヶ原から「こういう形で出版するのはけしからん」と騒ぎになって、天野先生はかんかんになっておられました。天野先生が怒られたのを私が見たのは、その時が初めてです。去年、お見舞いに行った時、学部長として上ヶ原でのことをこぼすと、「久野さん、僕が初めて学部長で上ヶ原の会議に出た時には、ある先生から『三田は関学とは認めていません』と面と向かって言われましたよ」と。かなり苦労されたのだなという気がいたしました。

さて、天野先生は環境経済学の草分けですけれども、ただ研究だけされていたわけではない。むしろ、研究成果を社会に生かす、社会を変えるということで、環境政策に対して常に積極的に関わろうとされていました。一つは環境省、一つは地元兵庫県です。それでは、当時は環境省で、現在は京都大学に移られた一方井さんからお話をいただきたいと思います。

一方井：ご紹介いただきました一方井でございます。先ほど久保田先生から、大変怖い先生という印象だったとお話がありました。私が天野先生と最初にお会いしたのは、平成3年に公害対策審議会委員になられた時に、私が事務局の取りまとめをする立場の時だったと思います。

平成3年は1991年ですが、1992年にブラジルのサミットがあって、その後1993年には環境基本

法という地球温暖化等を含めた総合的な立法ができます。そして、その翌年に国レベルの環境基本計画ができる。いずれも審議会にかかります。そこで天野先生から環境経済政策を中心に色々発言いただきました。

ところが、環境庁は皆様ご承知のように、水俣病等の激甚公害の対策から出発した官庁で、どちらかと言えば企業をバシッと規制することで汚染を止める、あるいは賠償金を取る等、わりに単純な仕事から出発してきたところがあります。なかなか環境税や排出量取引等は、我々行政の側にも十分にやる機会がなかったという状況がありました。

それがその頃から変わってきたわけですが、1度、私、大変怒られたことがありました。1994年の環境基本計画の審議会で、非常に基礎的な箇所での費用分担の話を書き込もうということになったのです。そこで、天野先生はOECDの汚染者負担の原則——PPPを入れようと言われた。私等も、政府内ですでに受け入れられた原則と思っていたのですが、よく調べると、閣議決定レベルではどこも合意していなかったのです。

汚染者負担の原則とは、公害等が起きた時、特に企業は色々な防止対策をしなければならず、それにお金がかかる。その金は一義的に企業が負担するというものです。もちろん製品価格に転嫁しても良いのですが、政府がお金を出してあげるのではなく、まずは企業が負担する、これがその原則です。ところが、当時、特に通産省は産業政策の一環として、汚染負担等にかかるコストを補助金で一生懸命出している。そんな立場からは、OECDの汚染者負担の原則は都合が悪い。それが背景にあったと思います。

それで、天野先生からは、「これからずっと地球化時代の環境政策を進めていく時にこれが認められないのですか」と、審議会の席ではなくて、事務方として先生方にご説明する場で、環境省の責任者である私に本当に怖い顔でおっしゃったのです。怖い顔と言うか、学問的迫力と言うのですか。あの時、私はもう覚悟を決めて、ここで先生の思いとして、この原則を入れないのならば環境行政とくに環境経済政策の未来はないと判断して、ちょっと大きめに聞こえるかもしれませんが、その文言を入れるために死ぬ気で通産省と折衝しました。

結果的に、「こんにちではすべての主体が」という主語の後に、「汚染等による環境利用のコストを価格に盛り込むことなどを求めたOECD等の汚染者負担の原則を踏まえ、うんぬん」と入りました。通産省が最後まであがいてOECDの後に「等」と入れるなど、役人的ですけども、まがりなりにもOECDの原則が入ったことで、これは以降の政策を実施する際に、非常に大きな根拠になりました。

天野先生は、OECDの汚染者負担の原則だけではなくて、環境税や排出量取引、いま話題の自然エネルギー固定価格買取制度等、色々なお話を国際的な視野で外国の制度を詳細に調べ、それをバックに話をされていました。しかし、審議会というものは利害関係者がみんな合意しないといけない。審議会とはいったい何なのだろうという問題が、今でもございますけれども、そんな中で天野先生のお思いがなかなか合意までいかない。法案や制度までいかない、という非常にもどかしい思いをお持ちではなかったかと思います。

先ほど病床で本を書かれたというお話がありましたが、2009年8月に中公新書で『排出取引』というとても良い本を書かれました。政府内でも排出量取引制度が混迷していましたが、その中身も詳細に分析され、しかも何がいけないのかまで率直に書かれています。環境省が怒られていて、そもそも気候変動政策を経産省と環境省が同等の立場でやること自体がおかしい。設置法をよく読んでみると。環境省はもっと頑張らなければいけない、としっかり書かれている。

さらに中身に触れると、2008年暮れに、経産省と環境省の妥協で排出量取引の試行を、経団連がやってきたものを土台にして、口が悪いかもしれませんが、格好だけつけたスキームが制度化されました。政府は、それで排出量取引が日本でも始まったと言っていたわけですが、天野先生は実態を詳しく分析され、この制度は理論的にもおかしいし、機能しないであろうと本の中ではっきり言われています。

歴史的に見れば、その後、この制度が動いていないことは一目瞭然で、先生がおっしゃっていることはまったくその通りです。世の中というのは、政府が堂々と言っていることでも間違いがいっぱいありますが、はっきりとそれを違うと言うのはなかなか勇気が要ることです。先生はそれを裏付けする資料をもとに指摘されている点で、私は大変尊敬しています。

先ほどひょうご講座のお話がありましたが、なぜ私が呼ばれたかということ、その前年に私は『低炭素化時代の日本の選択』という本を書きました。排出量取引や環境税等、天野先生がおっしゃっている環境経済政策が日本でも必要だと書いた本です。それをお送りしたら直ぐにハガキが返ってきて、先生から「読ませてもらった。この中身を2回にわたって、ひょうご講座でやってください」と。しかも「1回目はこれとこれをしゃべってください、2回目はこれとこれをしゃべってください」と。本を送って、「ありがとう」という返事はよく来ますが、ちゃんと読んでおられることにまずびっくりしました。

それで、本当に久しぶりに2009年の秋にお会いしました。やはり最初は、怒られた記憶が残っていたのですが、少しやせられてはいたのですが、お元気そうで、また、すごく慈愛に満ちた目でやさしく接していただいて、私も感激いたしました。

実は、天野先生の『排出取引』では、最初のはしがきに「本文中に若干の注をつけた箇所があるが、これはむしろ専門的な慣習なので、一般の読者の方はむしろ参考文献に掲げられた数冊の書物を読んでいただきたい」と書いてあって、後ろの方を見ると、私の本が3冊のうちの一つに入っていたのです。

私もびっくりいたしました。どの先生に褒められるより天野先生に褒めていただいたことは私の誇りです。天野先生が心血を注いで書かれた、環境省や国の環境政策にやってほしいというメッセージ、その志半ばで逝かれたという思いを、本当に万分の一でも、我々後輩が引き継いでいかなければいけないという思いを、今日は、本当に強くいたしました。先ほど、良いお写真だという発言がありましたが、本当にそのとおりです。今はこの天野先生の笑顔を思い出しながら、我々は頑張らなければいけないと思っている次第でございます。(拍手)

久野：ありがとうございます。実は私は15年間、環境政策を講義していて、「昭和45年の環境国会でPPPの原則が認められた」とずっと言っておりましたが、今、公式に認めたのは平成に入ってからと知りました。たいへん間違ったことを教えておりました。(笑)

それでは、最後に兵庫県の環境局におられた小林さんに、天野先生と地元兵庫県との関わりを聞かせていただければと思います。

小林：兵庫県OBの小林でございます。実は、こんな会合があることを、知事に申し上げたところ、知事から本当はぜひ伺いたいのだがということで、メッセージを託されました。これをまず先にご紹介をさせていただきたいと思っております。

「天野先生の偉業を振り返りながら、今後の総合政策のあり方を探るディスカッションが行われています。私も会場に駆けつけたのですが、公務のためかないません。このメッセージを託します。

国際経済学を極めた後、それにとどまることなく経済学的手法で環境問題の解決を目指す環境経済学の世界を切り開かれた天野先生、まさに総合政策の先駆者でした。総合政策の強みは何と言っても現実の課題に対処する力です。本県では環境政策の立案、推進や兵庫県立大学の設立運営など多方面で天野先生のご指導をいただきましたが、いずれの場でも穏やかな口調ながらしっかりした将来を見通し、今なすべきことを明確に示していただきました。複雑化する課題に柔軟に対応できる総合的な視点、想像力、実践力を身につけておられたからでございます。

このたびの東日本大震災はわが国の社会構造の問題を突きつけました。とりわけ原発問題は高度経済成長以降、効率優先、成長一本やりで進んできた私たちのやり方を問いただしています。経

済のあり方、エネルギーの政策のあり方、ライフスタイルのあり方など、あぶり出された諸課題を総合的、根本的に解決していかなければなりません。それだけに天野先生が情熱を傾けられた人と自然が共生する経済社会システムの実現が、またそれを支えていく総合政策の発展が今ほど切実に求められている時はないと言っていいでしょう。

天野先生の残された業績を引き継ぎながら私たちの英知を結集し、新しい発想と仕組みを持った日本を創造していこうではありませんか。本日の会が関西学院大学はもとより、わが国の発展の礎となると共に、ご参集の皆様方の健勝とますますのご活躍を心からお祈りしております。兵庫県知事、井戸敏三」

でございます。ご紹介いたしました。

天野先生というお名前は、以前からお聞きはしていました。しかし、環境にそれほど関心を持っておられなかったのではないかとということで、それなりにうるさい先生だなという印象しか持っていないでして。それが、私が1991年に県の水質課長になった頃から、先生が環境問題に関心を持たれたのではないかな、とっております。

当時、先生に兵庫県環境審議会の委員にご就任いただきました。ここでちょっと修正をお願いしますが、略歴の2ページに「平成6年8月に兵庫県環境審議会委員」と書かれていますが、これは間違いで、平成4年8月です。環境庁の中央環境審議会委員より1年早くに兵庫県の環境審議会委員になっています。こここのところは、兵庫県の名誉にかけて訂正をお願いしたいと思います。実は、環境経済論にやはり計量経済が重要ではないかという議論があり、そこで、天野先生にもぜひご参加いただきたいということで、環境審議会委員になられたのではないかなと思います。その証拠に、その1年後、気候変動に関する政府間パネル、いわゆるIPCCの第3作業グループにご参加いただき、第2次の評価報告書の第1章を執筆されていると聞いております。

中央環境審議会でも地球環境部会で一緒させていただきましたが、常に筋の通ったご意見であったことを記憶しています。特に2001年にスタートした地球環境部会では、政策部会の合同部会だったと思いますが、国内制度委員会で地球温暖化対策のために国内でどんな制度を制定すればよいかを検討され、まだ県の現職にいた私も専門委員ということで参加させていただきました。ここでは、天野先生がエネルギー需要とその価格の間に大きな関係があると主張されました。

それに対して経済界、特に経団連がエネルギー需要とその価格には関係がない。使用要求があれば、エネルギーは消費されると主張されたわけです。つまり、価格が上がろうと下がろうと、需要がある限りエネルギーは消費される。要するに、その主張は環境税を導入してもエネルギー政策はうまくいかないということです。

この主張に対して、天野先生はそうではないと、本日持参しましたが、大論文を環境審議会に提出された。その中で、先ほど触れられた排出量取引と環境税の導入が必要だと主張されました。その親審議会である地球環境部会でも、いま申し上げた「温暖化対策とエネルギー需要の価格弾力性について」という論文を提出されて、いわゆる経団連の「エネルギー需要と価格に関係がなく、環境税、炭素税の課税をしても省エネ効果はない」という主張に大反論されたことを記憶しております。

こうした天野先生の強いご意見に私自身感動するとともに、ふだん大変温和な先生がこういう時になるとなかなか引き下がらないのを、身にしみて記憶したことがございます。にもかかわらず、私自身、たいへん残念なのは、この天野先生のご意見について、環境税導入が税制調査会では中途半端に、塩漬けになっているのは大変残念だなと考えております。

この時には、先ほど紹介があった排出量取引の議論についても、天野先生はちゃんと実施しろ、中途半端なことをするな、試行するな、と言われました。私自身、当時、経産省の環境経済室長の方が兵庫県出身で、その室長が天野先生の強い意見に困って、内々に神戸まで来られて、「どうしよう」という話がありました。経団連は「つぶせ」と言う。天野先生は「続ける」と。この仲介案として、私が「試行」という案を出して、経産省が「じゃあ、それでいこうか」という話

で合意した経緯があって、後で天野先生から「中途半端なことをするな」とお叱りを受けたことを覚えております。

そういうこともございまして、天野先生は兵庫県の環境政策でも大きな痕跡を残していただいています。私が直接関わった中でも、兵庫県の地球温暖化防止推進計画、第3次の兵庫県環境基本計画の策定、生物多様性ひょうご戦略の策定、廃棄物等の不適正処理を防止する方策、ディーゼル車・自動車の運行規制、今後の環境教育・環境学習のあり方、そして廃棄物処理計画の策定、実績を挙げれば枚挙にいとまがございません。こういう形で、兵庫県の環境政策は天野先生から大きな影響を受けながら、指導を受けてまいったわけです。さらに地球環境戦略研究機関の関西研究センター長にもご就任いただきました。ここでも私も理事を勤めさせていただく関係で、環境ビジネスの推進についてご一緒に研究させていただきました。そして、これから実現させていただこうというところにあったわけです。

これを進める中で、普段は大変優しく、周辺の人たちに気を使われる反面、いざ物事を決めなければならない時には、はっきりしたご意見を出される。また、責任者として決定されていかれる。こうしたことに大変印象深く思っておる次第でございます。

私も県のOBとして、一昨年から環境審議会の委員になりました。この時、天野先生から「環境省では中央環境審議会等々で色々な意見を言っているけど、なかなか通らない。あれを兵庫県ではやろうじゃないか。これから頑張ろうぜ」と大激励を受け、またお声をかけていただいたわけでございます。そういう意味では、天野先生が今回逝かれてしまったことについて、兵庫県にとって大変大きな損失でございます。私自身も、これからどうしていこうか、考えております。改めて先生の残された多くの論文を読み返し、天野先生が残された環境に対する思い入れ、これを力の限り進めていきたいなというふうに考えています。

さらにそうした総合政策のあり方について、大学や企業が連携してより良い研究をコーディネートしていくことを考えて、一昨年、私自身、NPO法人を立ち上げました。このNPO法人には、久野先生にもご無理をお願いして、引きずり込んでおります。そこでは、今、新たな問題として里海政策というものをやっております。これは、単に海をきれいにするだけではなく、海を豊かな豊饒（ほうじょう）の海にしながら、経済的にどう管理していけば良いのか？ 色々な問題を調べております。

こうした課題にも、天野先生が出されたいわゆる総合政策のあり方、考え方が十分入ってきているのではないかと。そういう意味で、いま天野先生の業績を振り返りながら仕事をさせていただいているところでございます。（拍手）

久野：ありがとうございました。本日、5名の方々から、天野先生のことをお話いただきました。最後に、本日は天野先生の奥様がいらっしゃっております。私どもは、公人としての天野先生はよく存じ上げておりますが、プライベートな天野先生はほとんど知らないのです。私自身、音楽のことを初めて聞きました。先週、奥様をお訪ねした時、奥様との出会いの話も聞いて、初めて天野先生にも色々な側面があったのだと改めて知りました。ぜひ今日はそういうお話をかなりさせていただければというふうに思っております。どうかよろしく願いいたします。

天野：天野明弘の妻、天野素子と申します。よろしく願いいたします。

本日はリサーチ・コンソーシアム総会の中に夫、天野明弘の追悼会を催していただき、本当にありがとうございます。先ほどから色々お話を伺っておりますと、今まで私がまったく知らなかったこと、いい加減に漠然と理解したつもりでございましたことがたくさんございまして、いろいろ知ることができました。また、ありがたいお言葉も頂戴いたしまして、本当にうれしく思います。夫は家では、1日の大半を机とパソコンの前で過ごしておりました。腰痛を若い頃から持っていましたので、散歩することが苦手なものでございました。ほとんど外には出ないで、書斎の隣の部屋

で音楽を聴いたりして、くつろいでおりました。仕事をしながらも、やはり静かな曲をかけていることが多くございました。それが癒しだったのかもしれませんが。

夫が関西学院へ移りましたのは、ちょうど阪神淡路大震災の年でございました。その頃、3人の子どもたちはそれぞれ独立しておりました。私たちも時々、旅行やコンサートなんかを楽しんだり、子供や孫たちと食事を楽しんだり、そんなゆとりが少しずつ増えつつあった頃でございました。またその頃、書斎の中、机やらその辺りにいっぱい積み上げられておりました資料、書類、そういうものもガレキと一緒にほとんどなくなってしまって、新しく再建した書斎はとてもすっきりと片付いておりました。ちょうど関西学院に移りましたものですから、神戸大学の研究室にございましたものを、必要最小限度に整理いたしまして、それを持ち帰ったものがきちんと整理されて並んでおりました。

ところが、それから十数年、現在、机も書架も床もうず高く書類の山でございまして、足の踏み場もございません。ちょうど1周忌を済ませましたので、少しずつ整理をしようと思ひまして、この間から孫たちも手伝ってくれて、整理を始めております。たくさん資料、それからメモ、ノート、論文、時には審議会の資料、そうしたものを一つ一つ、ページをパラパラとめくったり、時には読んだりしながら、整理を始めました。本当によくこんなに勉強できたことだなど、一つのことによって膨大な資料を作ったり、実に驚きながら、でもこの膨大な書類、資料やノートや、そういうものを最後の1枚まで、最後の1ページまで、しっかり私が受け取ってあげようと思ひます。亡くなります前の最後のお正月に夫が、「今までやってきた研究のほとんどすべてをまとめて発表できて、とてもうれしい。本当に結構なことだ」と申しまして、「さあ、これから何をしようかな。また一から勉強だな」と申ししておりました。結構、楽しそうに話しておりました。神戸大学時代もそうでしたけれども、特に晩年、病と共に歩んできたこの十数年を本当にこのように充実して満足して過ごせましたのは、本当に皆様方にお支えいただいたからだと思います。深く深く感謝申し上げます。

同じお正月三が日には、何千枚もたまった音楽のCDを整理いたしまして、作曲家やジャンル別に分けてラベルを貼りました。長年忙しくてできなかったことがやっとできたと、うれしそうに満足そうに喜んでおりました。

晩年の大きな楽しみの一つに、西宮の芸術文化センターのコンサートがございまして。本当に少年のようにうれしそうに、指揮者の佐渡裕さんと握手をいたしまして、CDにサインをしてもらって、本当に少年のように喜んでおりました顔が忘れられません。その後、1.17の震災犠牲者を悼むコンサートがございまして、ヴェルディの『レクイエム』が演奏されました。それが最後のコンサートになりました。「ほんとはよかった、よかった」とたいそう喜んでおりました。

最後の最後まで、死ぬとは思っていなかったのではないかと思うのです。生きよう、生きたいと思っていたと思ひまして、実際、治療効果も顕著な時期がございましたが、最後に、肺に転移しましてからはもうあつという間に悪化いたしました。彼の生涯、本当にその時、その時、色々と皆様に支えていただきました。本当に夫と共に感謝感謝でございます。ありがとうございました。(拍手)

久野：奥様、どうもありがとうございました。本来は昨年のリサーチ・コンソーシアムの時にこの催しを行いたかったのですが、その時には、半年以上前から企画が進んでいて、スケジュールが固まっていたため、できませんでした。ようやく1年過ぎてできました。

実は、学生はもとより、教職員でも、天野先生のお顔を知らないメンバーが増えているわけです。今こそ改めて天野先生の遺影に総合政策の前進をお誓いしたいなというふうに思っております。本日は皆さん、ようこそお越しいただきました。天野先生の遺影に向けて改めてお誓いしたいと思っております。ありがとうございました。(拍手)

